

国語科教育のインクルーシブ化に向けて

「多様性を描いた絵本」から考える――

関西学院大学
原田 大介

一 インクルーシブ教育とは何か

インクルージョンとは、「包摂」や「包容」と訳されることばである。国語科教育のインクルーシブ化をめざすこととは、「多様性を包摂することばの学びの場になること」をめざすことを意味する。ここで言う多様性とは、さまざまな身体や生活背景のある、さまざまな子どもたちのことである。と同時に、多様性とは、多様な子どもたちが考える、あるいは多様な子どもたちから想定されうる、多様な価値観や文化、思想のことでもある。国語科教育という政治的・制度的な教科の枠組みは、より多様性に拓かれた目標、内容、方法、評価の観点をもつ枠組みへと、変わり続ける必要がある。

しかし、国語科に携わる私たち教育関係者が、国語科教育のインクルーシブ化に向けて何を議論すべきかについては、これまでに十分に検討されてきたわけではなかった。

また、私たちはインクルージョン、あるいは多様性という考え方に対して一定の理解を示しつつも、その理論や実践の具体化となると、イメージをもつことが困難な状況が続いている。この理由はさまざまに考えられるが、その一つの原因として、これまでの国語科教育の実践や理論では、「学習者中心」や「個に根ざす」などのことが先行する一方で、「今ここ」を生きる子どもたち一人ひとりのリアルな身体や生活背景に迫ることが十分にできず、結果として子どもたちの実態を踏まえたことばの学びの場になりにくかったことが考えられる。私たちが「学習者中心」の国語科教育の実現をより深いレベルでめざすのであれば、インクルージョンや多様性といった概念に光をあて、「今ここ」を生きる学習者の世界を見つめ、国語科の理論と実践を提案することが求められる。加えて、多忙な教員が、現実的に実現することが可能な「授業開発」や「教材開発」の具体案を示していくことも大切である。

二 「多様性を描いた絵本」の可能性

国語科教育のインクルーシブ化に向けて考えなければならぬことは多々あるが、本稿では、「多様性を描いた絵本」に焦点をあてて考えてみたい。この理由には、三点ある。第一に、絵本では子どもたちの多様な身体や多様な生活背景が描かれていることが多いため、教科書教材だけでは触れることができなかった多様な価値観に子どもたちが触れることができるからである。第二に、絵本は、たとえば漫画やアニメ、ゲームなどと比べると授業の教材として用いることに対して「抵抗」が少なく（漫画・アニメ・ゲームの立場が学校内で弱いことの問題は別に議論する必要がある）、教員が教材として用いやすいからである。第三に、絵本がまさに保育の現場で用いられているように、その内容は言語（バーバル）だけでなく、「絵」という非言語（ノンバーバル）を中心に構成されているため、教育的な支援を要する子どもたちが学びに参加しやすいからである。

「多様性を描いた絵本」というメディアは、子どもたちが自身の多様性を知ることや、他の子どもたちの多様性に学ぶ上で、示唆に富むものである。まずは、私たち国語科教育の関係者が、「多様性を描いた絵本」を授業で用いることの意義や必要性を共有する必要がある。

三 授業づくりの観点から見た「多様性を描いた絵本」

人権講習会や児童文学の研究会等で偶然に出会う場合ののぞき、教員が「多様性を描いた絵本」に触れる機会は少ない。このため、国語科の授業づくりのあり方を議論する場面においても、教員の口から「多様性を描いた絵本」が語られることは、ほとんどない。そもそも、多様性を描いた絵本の存在自体が十分に知られていないのが現状である。このことを踏まえ、本稿では、書店で入手できる範囲の「多様性を描いた絵本」を集め、その内容をもとにいくつかのカテゴリーに分けることで、インクルーシブな授業をつくるための基礎資料（絵本のリスト）を作成した。以下、「(1)多様な家族」「(2)多様な性」「(3)多様な身体」「(4)多様な姿・見た目」「(5)外国とのつながり」「(6)虐待」「(7)多様性をめぐる考え方・向き合い方」という七つのカテゴリーに分類して整理した。参考にされたい。

(1) 多様な家族

- ・メアリ・ホフマン文 ロス・アスキイス絵 (二〇一八) 『いろいろななかぞくのほん』少年写真新聞社
- ・森佐智子文 MAYA MAXX絵 (二〇〇二) 『しろねこしろちゃん』福音館書店
- ・酒井駒子作絵 (一九九九) 『よるくま』偕成社
- ・サトシン作 西村敏雄絵 (二〇一一) 『わたしはあかねこ』文溪堂

(2) 多様な性

- ・ジャスティン・リチャードソン&ピーター・バーネル文 ヘンリー・コール絵 尾辻かな子・前田和男訳(二〇〇八)『タンタンタンゴはババふたり』ポット出版
- ・リンダ・ハーン&スターン・ナイランド絵と文アンドレア・ゲルマー/眞野豊訳(二〇一五)『王さまと王さま』ポット出版
- ・ジェシカ・ウォルトン作ドゥーガル・マクファアソン絵川村安紗子訳(二〇一六)『くまのトーマスはおんなのこ ジェンダーとゆるじょうについてのやさしいおはなし』ポット出版プラス
- ・マイケル・ホール作 上田勢子訳(二〇一七)『レッド あかくてあおいクレヨンのはなし』子どもの未来社
- ・ながみつまき文いのうえゆうこ絵(二〇一六)『りつとにじのたね』リーブル出版

(3) 多様な身体(主に障害)

- ・バーバラ・エシャム文 マイク&カール・ゴードン絵 品川裕香訳(二〇一四)『ボクはじつとできない 自分で解決法をみつけたADHDの男の子のはなし』岩崎書店
- ・バーバラ・エシャム文 マイク&カール・ゴードン絵 品川裕香訳(二〇一三)『算数の天才なのに計算ができない男の子のはなし 算数障害を知ってますか?』岩崎書店
- ・星川ひろ子写真 文 星川治雄写真(一九九七)『ぼくのおにいちゃん』小学館
- ・ナン・グレゴリー作 ロン・ライトバーン画 岩元綾訳(二〇〇一)『スマッジがいるから』あかね書房

(4) 多様な姿・見た目

- ・藤井輝明文 亀澤裕也絵(二〇一〇)『てるちゃんのかお』金の星社

ンペリ絵(二〇一七)『わたしのせきになじやないーせきになじやないー』岩崎書店

実際に絵本をカテゴリーに分けてみると、いくつかのカテゴリーで内容が重複することがわかる。また、カテゴリーを考え、そのカテゴリーに絵本を無理に位置づけようとする、その絵本がもち得たはずの読みの多様性を狭めてしまう危険性があることにも気づかされる。一方で、多忙な教員が「明日の」授業づくりや教材の開発を試みる上で、このようなリストがあれば便利であることもわかる。

今後、国語科教育のインクルーシブ化に向けた議論を深め、広げていくためには、「多様性を描いた絵本」をめぐる知見を教員や研究者で共有し、国語科授業という実践的な観点から議論していかなければならない。リスト化においては、絵本をカテゴリーに分けることの限界や問題点を踏まえた上で、さらには教員個々の多様性をめぐる考え方や絵本の受けとめかた・読みかた等を反映したものであることも踏まえた上で、絶えず更新していくことが欠かせない。

そして、「多様性を描いた絵本」をもとに、私たち国語科教育の関係者は、インクルーシブな国語科授業を構想・実践し、検証することが大切である。たとえば永田麻詠(二〇一四)では、リストの「(7)多様性をめぐる考え方・向き合い方」でも挙げている『たかこ』(清水真裕文 青山友美絵、二〇一一年、童心社)という絵本を用いた国語科授業

- ・白井三香子作 渡辺あきお絵(一九九二)『ゴリラのパンやさん』金の星社
- ・クリスチャン・メルベイユ文 ジョス・ゴフィン絵 乙武洋匡訳(二〇〇一)『かくくん どうしてボクだけしかくいのか?』講談社
- ・デビッド・マッキー文 絵 きたむらさとし訳(二〇〇二)『ぞうのエルマー』BL出版

(5) 外国とのつながり

- ・森枝卓士文 写真(一九九八)『手で食べる?』福音館書店
- ・セルビー・ビーラー文 プライアン・カラス絵 こだまともこ訳(一九九九)『せかいのこともたちのはなし はがぬけたらどうするの?』フレールベル館

(6) 虐待

- ・MOMO作 YUKO絵(二〇〇三)『わかってほしい』クレヨンハウス

(7) 多様性をめぐる考え方・向き合い方

- ・中山千夏文 和田誠絵(二〇〇五)『どんなかんじかなあ』自由国民社
- ・清水真裕文 青山友美絵(二〇一〇)『たかこ』童心社
- ・くすのきしげのり作 石井聖岳絵(二〇〇八)『おこだでませんように』小学館
- ・乾菜里子文 西村敏雄絵(二〇〇三)『バルバルさん』福音館書店
- ・奥井一満文 得能通弘写真 小西啓介AD(二〇〇二)『みんなおなじでもみんなちがう』福音館書店
- ・ヨシタケシンスケ作 伊藤亜紗相談(二〇一八)『みえるとかみえないとか』アリス館
- ・レイフ・クリスチャンソン文にもんじまさあき訳 ティック・ステ

を構想している。中学二年生を対象に、全四時間から構成されるその単元名は「他者の理解しにくい面も含め、他者とうかがわかるかを考えよう」とあり、単元の目標は「絵本から読み取れるコミュニケーションへの考え方について、自分の日常生活と関連づけて考えることができる。・絵本を朗読するなどして、古典特有の言葉遣いやリズムを楽しむことができる。・他者とかかわる難しさや、かかわることのできる喜びを自分の日常生活と関連づけて考えることができる。」とある。「国語科での学びをコミュニケーションや関係性支援により広げていく」ことを指摘する永田の研究を通して、権力弱者としてのマイノリティだけでなく、「健常者・定型発達者」といった教室内のマジョリティをことばの学びに巻き込むことの意義を確認できるだろう。

国語科教育のインクルーシブ化に向けて、「授業開発」や「教材開発」のあり方は、これまで以上に問われている。「多様性を描いた絵本」を国語科授業で用いることの可能性と課題について、引き続き検討していきたい。

注1 永田麻詠(二〇一四)「中学校国語科におけるコミュニケーションの授業―特別支援学校/学級に学ぶ通常学級での取り組み」浜本純逸監修 難波博孝・原田大介編『特別支援教育と国語教育をつなぐ』ことばの授業づくりハンドブック 漢水社、一七七頁―一九四頁